

雪崩事故にあわないために

—— 高所登山の面から ——

尾 形 好 雄

私は高所登山の面から雪崩遭難事故について述べてみたいと思います。

戦後の1952年から1995年までの44年間に6,000m以上のヒマラヤの高峰へ向かった日本の登山隊は約1,300隊を超え、入山者数は延べにして約1万人近くにも及びます。輝かしい栄光の陰で悲劇も繰り返され、ヒマラヤ登山の遭難事故率は約2.5%と云う驚くべき数字となっております。これらの遭難事故を原因別に見てみますとその半数が雪崩による遭難です。雪崩遭難の場合、その大半が大量死亡事故につながっているのも見逃せない特徴の一つであります。

雪崩遭難の事例を見ますと、やはり何日か悪天候が続いた後、大量に降り積もった新雪による表層雪崩にやられているのが圧倒的に多く見られます。「雪が降り止んでも雪面が安定するまで待たなければならない。」と云う誰もが判りきってるような鉄則が、迫りくる雪崩の恐怖感から守られずに行動を起こして雪崩に流されたり、異常な降雪によって、安全を見極めて設営したであろうと思われるテントが、雪崩で流されたり、埋没してしまうなど悲惨な例が見られます。

確かに乏しい資料を元にルートなりキャンプ地の雪崩を予測することは容易なことではないでしょう。ただ、ここで我々が良く認識し、誤ってならないのは困難と危険の違いです。鋭い岩稜や急峻な岩壁などは、確かに技術的な困難性があるかも知れませんが、多くの場合、固定ロープなどルート工作して安全が保たれます。これに対して、易しいルートへエスケープしようと冗長で広大な雪稜や雪壁へ転進したりすると、技術的な困難さは回避できても、ホワイト・アウトや雪崩などの危険性を背負うこととなります。そしてこの自然界のリスクが時として人間の予知能力をはるかに超えた悲劇をもたらすことになるのです。

雪崩が来るのを判っていても、どうしてもそのルートを登りたい、または登らざるを得ない、と云うのは登山と云う行為からしてやむえないことなのでしょう。

1978年にその執念の山を陥落せんがために再度同じ山の同じルートに向かって明暗を分けた二つの登山隊があります。

一つは、静岡登攀クラブのバインター・ブラック隊です。この会は1974年に同峰の南壁に挑みながら雪崩によって敗退を強いられており、再度、78年に挑んだ時は、徹底した雪崩対策を取って4年前の雪辱を果たし、南壁を完登しました。荷物を最小限にして危険箇所の通過を少なくしたり、早朝出発を厳守し、復路を翌朝にまわすなど1日行程を2日行程にするなど、彼らは当たり前の対策としていますが、その当たり前の事がなかなか守られないのが多いのです。

4. 論文

もう1隊は、P29を目指したツラギの会です。この隊も同じく74年に南西壁から挑みながら雪崩によって敗退された登山隊です。78年に再度同じルートに向かうに当たり、彼らは前回の経験から登山時期をプレからポスト・モンスーン期に替え、さらに危険箇所の通過をスピーディ且つ効率良く行おうと、ウインチによる荷上げを考えて出かけました。しかし、皮肉にもそのウインチをセッティング中に予想もしない西壁と南西壁を分ける1,000m余りの垂壁上部の懸垂氷河が崩壊して直撃し、その爆風によって3名が死亡する痛ましい事故に見舞われたのです。誠に不運としか言いようがありません。

この懸垂氷河やセラックスの崩壊による氷河雪崩はヒマラヤの特徴的な雪崩の一つです。この雪崩の典型的なものは、懸垂氷河の舌端が欠け落ちるものです。この氷河雪崩は氷河の流下に伴って押し出されるものですから降雪や日射による気温上昇がなくても落ちる時は自然に落下するため、予測は極めて難しく厄介なものです。また、この懸垂氷河の崩壊は、落下したブロックがさらに表層雪崩を誘発する危険もはらんでおり、この二次的な表層雪崩に巻き込まれた悲惨な例も見られます。

次にヒマラヤの降水量と雪崩遭難の関連ですが、モンスーンの影響を受けるネパールやガルワール・ヒマラヤでは、登山時期をモンスーンの前にするか後にするか、即ちプレ・モンスーン期にするかポスト・モンスーン期にするか真剣に検討されてきました。これまでのヒマラヤの雪崩遭難を見ても、ポスト期の登山隊が圧倒的に多く雪崩事故に遭遇しております。ヒマラヤの場合、モンスーン中に大量の雪がもたらされるのは周知の通りです。日本の統計を見ましても積雪の多い年には雪崩事故も多くなっており、この降水量と雪崩の関係はヒマラヤでも同じです。

ヒマラヤの気象については古くから研究され、プレ期、ポスト期ともその概要は良く知られていますが、それを普遍的なものとしてとらえていると時として手痛い悲劇をこうむることがあります。

1981年の9月下旬にヒマラヤを襲ったサイクロンによる雪崩遭難などもその一つです。僅か2日間に各地で雪崩遭難が相次ぎ13名もの尊い命が奪われてしまったのです。この遭難時には平地でも大雨に見舞われ、インドやネパールでは大洪水による大きな被害が出ています。

こうした大災害が起こるたびによく何十年振りの異常気象だった、などと言われますが決して稀なことではなく、詳しく調べてみますと結構数多く報告されております。特にこのところモンスーン明け直前の豪雪で大きな犠牲を強いられているケースが多く見受けられます。ポスト期の登山の場合、この名残モンスーンを如何にやり過ごすかが、キー・ポイントです。

1982年の秋にそれまで9隊もの挑戦を退け難攻不落を誇っていたダウラギリI峰のペアー・ルートが登られました。登頂したのはカモシカ同人隊です。この隊はこのルートの問題点の一つである7,500m以下の雪崩対策として、その危険度の最も高いモンスーン末期の降雪をやり過ごすためにBC入りを出来るだけ遅らせる作戦を取りました。BC入りが9月20日という遅い時期でした。自分たちの予定ルートに雪崩の危険が予測される場合、このぐらいの周到さがあるべきでしょう。

ポスト期の登山でこのようにBC建設を遅らせたのでは、登山期間が短縮されてしまっていて登頂がお

4. 論文

ぼつかなくなる、と思われるかも知れませんが、豪雪に擱まって悲惨な目に遇うよりは、短ければ短いなりに効率の良い登山を考えるのもタクティクスです。因みにこの隊は積極的に酸素を使用して、あの難ルートにキャンプ6つも出す包囲法を展開しながらも28日間で登頂しているのです。

最近の傾向を見ますと、ポスト期の早い時期に登りだし、酷い積雪に苦しめられながら登っている隊が多く見受けられます。一つにはポスト期の強風を恐れるあまり、早く登ろうとするのですが、そのために雪崩の脅威に晒されながら登る、というのも余り関心出来ません。ポスト期の登山時期は、レイト・オータムに絶好の天候が到来することも念頭において、自分たちが登る山、ルートを良く研究して熟考すべきだと思います。

(日本ヒマラヤ協会)